

とて

ふこれ名のいそり

之重の幸ふ志る

いふそくわ

大平

文政三年

庚辰十月十日



Handwritten text in a vertical column, enclosed in a rectangular border. The text is written in a cursive style and appears to be a formal document or letter. It begins with characters that could be interpreted as '大平' (Ohi) and continues with several lines of text. The characters are somewhat faded and difficult to read precisely, but the overall structure is that of a formal communication.

Handwritten text in vertical columns, likely a historical record or official document. The script is a form of Chinese calligraphy. A red seal is visible at the top of the page.

Handwritten text in vertical columns, continuing the record or document. The script is consistent with the text on the adjacent page.

天保十三年一月
中 孫 丹 遠

指出磯 をいん人の
いめい設る 目録 百事

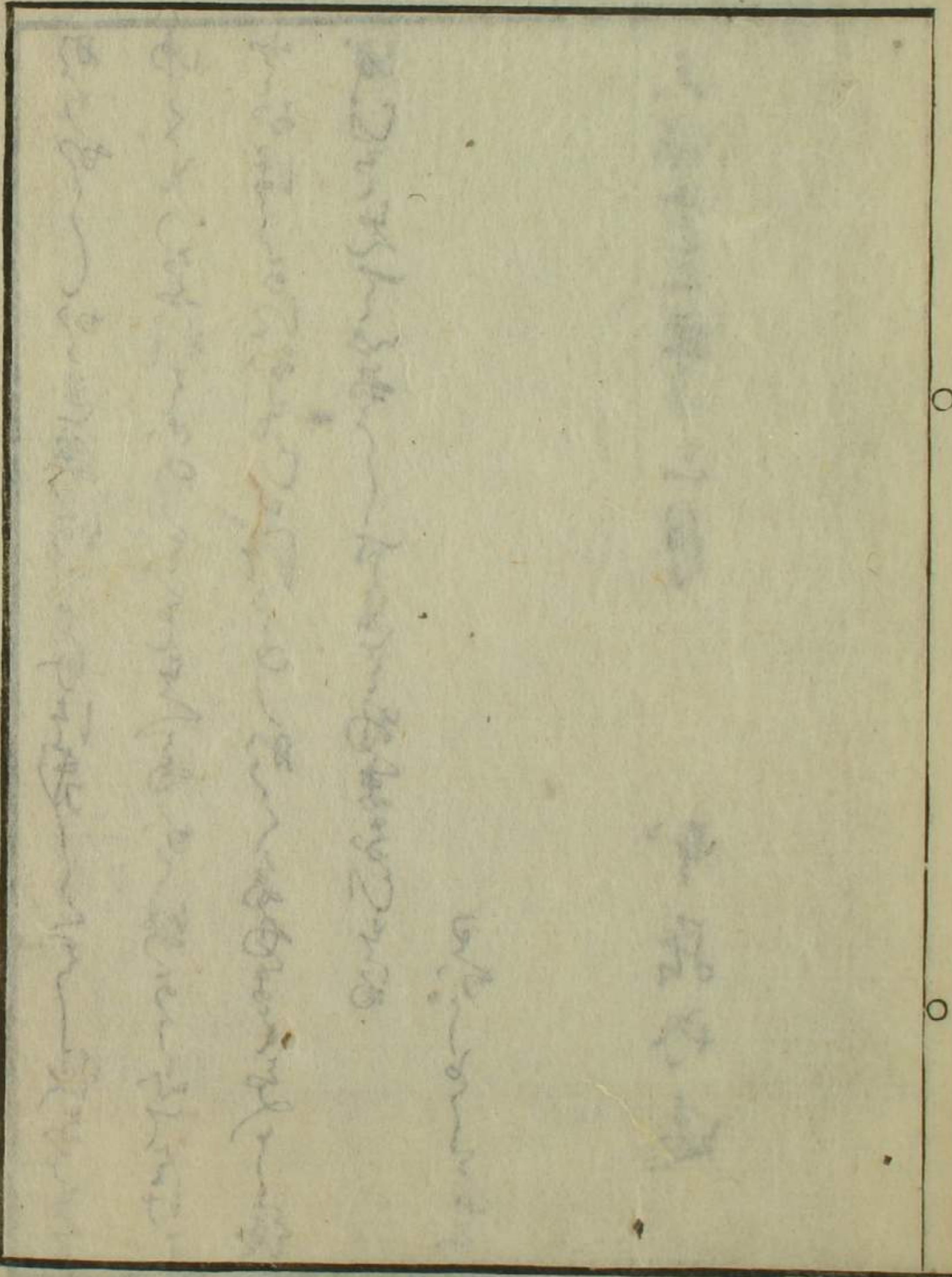
- 丁初 ○ 詞に依てせしめしむへき事。
- 右三 ○ てんま云をいんハ也と云ふ事。
- 右日 ○ 万葉集。詞活用の所をある事。
- 右五 ○ 世に云下知言より此流ありぬ。
- 丁六 ○ おりぬと云詞の活のいし給ふ。
- 右六冠 ○ おりぬと云詞の活のいし給ふ。
- 右七 ○ おりぬと云詞の活のいし給ふ。
- 右九 ○ 詞の活のいし名を設る事。

○指出磯目録

磯の洲崎の

- 丁初 ○ ケリつめキ也といひひごと。
- 右四 ○ むふむあるのけぢぬ。
- 右五 ○ たのむ・たのむる。
- 右八 ○ 大。ラ。のうろきおりき。
- 右十 ○ (エ)韻の音ども。ラリルレト。
- 右十一 ○ いまれぬ。いさる。
- 右十二 ○ う。う。う。を。う。う。へ。あ。
- 右十三 ○ 終る。ま。ま。き。事。

○磯洲崎目録



考へ定めたなり。な。案。き。て。う。く。さ。ぬ。の。事。ハ。詞。の。八。衢。と
い。へ。る。書。不。む。よ。と。論。ぜ。る。な。る。を。う。の。書。よ。き。書。よ。は。あ
れ。ど。何。ゆ。り。よ。こ。は。や。う。た。う。の。よ。に。さ。て。う。つ。り。て。い。ふ。一。へ。こ。う
な。も。ぬ。事。也。な。ら。ん。こ。の。よ。か。と。云。お。こ。せ。さ。と。い。ふ。や。是
を。き。て。さ。れ。も。す。で。よ。さ。い。あ。い。他。の。考。も。何。ら。さ。れ。ど
詞。よ。う。り。て。志。し。とい。へ。き。と。せ。し。とい。ふ。べき。もの。ら。ぢ。め。れ
あ。る。べき。論。め。た。ま。い。い。よ。さ。説。たり。との。思。居。し。よ。さ
ら。バ。又。い。と。さ。ら。さ。説。も。の。何。ら。よ。や。そ。も。あ。ら。ね。ど。志。し
せ。し。の。わ。い。と。め。た。ま。は。猶。う。の。八。衢。の。説。こ。そ。よ。う。う。ん。を

なりんかきかといひ。ついでにほべて詞のくさることをいふこと
のいさう。こ。さ。の。の。か。る。べき。こと。より。あ。ど。あ。れ。う。れ
といひ。う。ば。子。穎。さ。ら。う。こ。ら。ひ。て。その。と。か。い。へ。る。や
う。を。と。あ。る。ま。う。よ。さ。う。で。の。い。その。や。う。た。う。さ。こ。さ。い。出。を
る。べ。た。れ。ど。君。が。こ。代。を。む。や。ち。よ。と。い。ふ。ち。ど。り。れ。あ。と
の。ち。ど。り。が。ま。よ。よ。い。さ。う。か。い。つ。く。そ。も。く。詞。八。衢
1. 四種のつらさといふ事を云ては、何れとあつても云
の條を是よてつきぬべしといふは、あつぬらつても、これ
上卷のは、つらよても明うたう。されば、これ、固く

○女八ちまゝ三返ニズ
 テ考スレト思ヒ
 シ詞モ大カタハ
 猶カノ因外ニ出ル
 ニ非ルヲモリ
 又カノ因外ノ活ト
 イハレイタク異ナ
 ルニハ非ルヲモリ
 テノ後アラハセルハ
 和語訳畧因アレテ
 審ニステテのち
 ベヲ刪補セルガ辛
 丑彫刻ノ活語指節

うしうて物
 さらばこそ
 うくひをそれやがて八衢は涙めるむかことなりとか
 らばいぞ甚ううハ涙むまじきことある説のつづきならんこそ
 づうまほしくたれさてかろぬやうひの外はほべて古書を
 うふふみハちまゝこのこ涙をてをけむべうとハ我も既
 くよりおひひをるハ先古事記につまこ微とあるハあめ
 なるべしと見えぬ処なりとさあはれ
日本紀ハつぎ
 こ昧よしあり
 さて仁徳
 紀ノ于磨臂首能云多由磨
こも由の下ニ流とあるハ多
 衣磨とあるうなるへくおハるく処也
 又万葉集十卷六天漢已向立て云同十八卅許牟可比云
 の己許又同十七七あはさうふ云家禮婆同廿廿みつを

○陀毘理弥喻ノ類
 一ハ活雜四編ニ具
 論ス八五奈老へ

○ルせるハ山口菜ニト
 カクイハ旨哉那
 總旨摩ハ彼略因

れ云價爾互云の家價又同六卅あぬをとも云云
 出為利所見武烈紀つと陀毘理弥喻これらの云さぬ
 こたハちまゝある因乃定例ハことなれり又万葉
 十三卷爾太遙又同十八卷孫枝毛伊都追同十九
 卷六あふちうく云保理登流千載ハハレを海同十
 六所射鹿手又齊明紀伊喻之之手とあるなどあれ
 らこれらの八衢なる因の中に入べき詞とハせえな
 らうねと異なりてこれ因のまゝしてハ入がさきさぬ也
ハ外古事記万葉ニをりく又くからせらるるハ詞又雄畧記ニあるハ
 旨哉那旨摩又竹明紀やまおえて云麻自珥さて万葉ニ召賜良之明來者同

○指出機

○四

二因又トテ署示セ
ル処ニ入ベキニ其
説ハ活語指南ニ出
之又一家ト稱ハ
活雜三編(六)条ニ

○映昏カキオケル后
ニ友鏡底過影ヲ
修補スル序ニ加ハ
④若シ古ハ久ハ
③祖ハ保ハ

奈ハキノ音ニテ
用タルモノナリ
ハシハ世雜(四)或ハ又
ノ条ニ云ル如ク
加爾ハ兼字ニアタ
ル語四段活ハ云ヘキ
致ト思ハル類毎
ビナレリ

賜良之。同廿卷都藝豆賣須良之多加ナ刀能。又曰卷セウナノ家ノモエ之祁。同廿
や一氣。又^卅ふが氣。このよを。又^卅うつろく^卅氣。又^卅すこ^卅氣。又^卅古布志氣。毛波母
これ一の云云のさぬつねの空りののさ^卅き
とねはべてアキナリ。これハ別ニ論ある事あり。うく異やう^卅な^卅ふ^卅詞^卅ども
万葉廿卷ノハ殊ニおほし。そ大ニ^卅波^卅つ^卅く^卅べ^卅し。うれ卷
廿丁廿二丁 久麻豆といふ。又^卅ふ^卅お^卅め^卅保^卅ど^卅こ^卅い^卅て^卅古
卅丁廿二丁 米知やれらん。又^卅う^卅ま^卅の^卅う^卅れ^卅波^卅保^卅麻^卅米^卅の^卅又^卅白^卅浪^卅の
やへ手流我上。又^卅妹^卅都^卅岐^卅許^卅曾^卅又^卅日^卅り^卅れ^卅も^卅之^卅太^卅波^卅又^卅九^卅
阿蔽。ま^卅は^卅く^卅も^卅又^卅日^卅須^卅具^卅波^卅由^卅氣^卅と^卅も^卅云^卅。又^卅り^卅れ^卅西^卅奈^卅布^卅
母。又^卅ち^卅ち^卅の^卅子^卅曾^卅流^卅又^卅右^卅り^卅一^卅氣^卅比^卅等^卅又^卅由^卅古^卅作^卅
きり。又^卅あ^卅は^卅ふ^卅れ^卅の^卅へ^卅古^卅祖^卅あ^卅る^卅浪^卅云^卅。於不世他麻保加云^卅。

又^卅う^卅ぬ^卅め^卅等^卅之^卅又^卅生^卅み^卅て^卅根^卅ま^卅し^卅を^卅又^卅と^卅り^卅加^卅爾^卅豆^卅。
又^卅わ^卅が^卅ゆ^卅き^卅の^卅い^卅る^卅都^卅久^卅し^卅バ^卅云^卅。羨^卅祿^卅波^卅保^卅久^卅毛^卅又^卅奈^卅
奈^卅并^卅加^卅流^卅衣^卅し^卅世^卅流^卅ら^卅が^卅膚^卅ハ^卅又^卅日^卅麻^卅都^卅呂^卅倍^卅奴^卅於^卅あ^卅奈^卅
な^卅め^卅ど^卅さ^卅の^卅こ^卅ハ^卅ら^卅さ^卅く^卅て^卅さ^卅い^卅い^卅て^卅び^卅さて^卅中^卅む^卅く^卅の
よ^卅き^卅ふ^卅も^卅も^卅ほ^卅ど^卅へ^卅は^卅れ^卅こ^卅し^卅折^卅終^卅る^卅事^卅も^卅や^卅と^卅け^卅る^卅日
救^卅し^卅そ^卅へ^卅て^卅云^卅。そ^卅も^卅つ^卅ね^卅日^卅よ^卅そ^卅へ^卅て^卅り^卅こ^卅ハ^卅そ^卅ひ^卅て^卅な^卅る^卅べき^卅さ^卅ぬ^卅
受^卅し^卅き^卅処^卅な^卅れ^卅ど^卅月^卅つ^卅る^卅へ^卅ぬ^卅と^卅ある^卅と^卅日^卅例^卅也^卅。さ^卅う^卅く^卅四^卅段^卅ノ^卅下^卅二^卅段^卅ノ^卅活^卅き^卅さ
ま^卅ら^卅し^卅お^卅の^卅つ^卅ら^卅し^卅あ^卅ら^卅と^卅物^卅を^卅し^卅ら^卅し^卅の^卅ら^卅め^卅け^卅ら^卅る^卅詞^卅を^卅か
ま^卅れ^卅互^卅に^卅終^卅ハ^卅ま^卅ち^卅ゆ^卅ら^卅か
ども^卅あり^卅。別^卅ニ^卅委^卅ク^卅論^卅べ^卅し。也^卅や^卅う^卅い^卅へ^卅る^卅を^卅も^卅あ^卅ら^卅べ^卅し。ま^卅ら^卅ら^卅め^卅し
た^卅。所^卅の^卅こ^卅ら^卅さ^卅さ^卅ぬ^卅り^卅し^卅う^卅り^卅ふ^卅ら^卅あ^卅れ^卅ど^卅ハ^卅必^卅ま^卅つ^卅ら^卅ぬ^卅の^卅こ^卅ら^卅さ^卅さ^卅ぬ^卅也^卅
今^卅世^卅ハ^卅い^卅え^卅も^卅休^卅四^卅段^卅活^卅と^卅云^卅さ^卅ぬ^卅る^卅詞^卅の^卅い^卅ら^卅ハ^卅下^卅二^卅段^卅活^卅と^卅い^卅ふ^卅さ^卅ぬ^卅る^卅詞^卅ハ^卅い^卅と^卅サ

○指出破

ゆりて。古事記。宇自多加禮とあり。外。二ハをさく。そく。後世のまじも。ことい
くゆる。下二段活なり。万葉まじも。は四段活まじも。例ハあり。隠る。忘る。あどこ
きくれ。あるを。今ハ。そく。入。そ。後の言。こても。必ず。つろ。ハ。ぬ。たる。へ。き。処
なり。を。や。これ。を。り。て。あ。ふ。一。詞。活。と。い。ふ。こと。ハ。は。て。て。定。格。ある。こ。似。たり。さて。又。う

此ハ。衝。一。世。一。い。も。ゆ。は。下。知。の。詞。々。ま。じ。と。い。は。れ。ど。い。ハ。四。段。活
語。一。も。一。文。字。を。添。へ。たる。例。中。む。う。一。の。書。ど。も。一。い。と。多

かり。後世。二。ハ。より。を。そ。へ。ね。ハ。た。く。ま。び。や。や。詞。も。万。葉。か。じ。も。そ。へ。さ。り
し。これ。う。れ。と。い。は。れ。後。世。二。ハ。よ。と。い。は。れ。詞。一。万。葉。二。ハ。は。舞。を。そ。へ。は。り。と。い。は。り
た。さ。う。な。り。琴。後。集。か。り。長。か。り。万。葉。の。こ。ろ。よ。と。い。は。れ。さ。り。し。例。な。り。詞。一。よ。も
ハ。を。そ。へ。て。五。七。句。を。か。せ。る。う。う。い。く。あ。ら。ん。し。さて。あ。ら。ん。も。や。後。も。そ。二。の。う。ら
か。で。よ。も。ト。を。そ。へ。ハ。せ。下。知。と。い。は。る。詞。か。る。を。り。く。ハ。そ。れ。一。も。一。文。字。を。そ。へ。る。も。う。ら
と。い。は。る。也。源。氏。物語。な。ど。う。ら。を。り。く。又。え。ん。ま。れ。ハ。あ。り。し。今。そ。こ。思。あ。ら
び。の。は。落。窪。大。和。な。ど。二。ハ。を。り。く。そ。そ。な。ひ。と。あ。ら。つ。ち。ら。れ。む。字。誤。も。う。ら
さ。る。べ。し。さ。け。詞。一。も。を。あ。ら。び。と。い。は。れ。あ。ら。二。ハ。衝。一。の。混。て。論。せ。む。中。昔。の。ふ。み
ま。く。ハ。人。ハ。う。ら。り。て。伝。せ。さ。る。べ。し。古。事。記。ハ。か。と。せ。ハ。ち。や。の。作。ぬ。一。の。件。へ。も。云。わ。ら。う
し。こ。う。し。こ。も。此。事。を。り。て。思。ひ。あ。ら。ざ。ら。ん。ハ。衝。一。も。四。段。活。語。一。ハ。よ。と。云。て。下

○後年考レバコノ湖
日本ノをとの巻ナ
ル詞ハ。お。い。せ。代。三。テ
と。二。ハ。ア。ラ。サ。リ。ケ
リ。夕。極。下。ノ。筆。ク
セ。ノ。濫。ラ。ハ。レ。キ。三。
カ。リ。テ。以。詩。例。ア。ニ
タ。ハ。山。田。等。ニ。ト。カ
ク。云。大。ケ。リ。

知。と。い。ふ。こと。た。え。て。や。い。は。れ。い。ま。さ。り。き。と。う。り。三。作者。の。ま。じ。ハ。こ。や。う。あ。れ。ど。世。一。い。は
ゆる。ま。じ。と。い。へ。る。処。の。い。ひ。さ。ぬ。事。こ。は。た。し。り。ね。も。誰。も。大。く。お。ろ。こ。ん。ん。な。ら。ん。は。ら
お。り。ひ。ま。が。へ。も。そ。い。や。う。か。り。ん。と。い。は。れ。一。詞。一。ハ。衝。一。に。依。行。変。格。活。と。い。は。れ
る。よ。く。承。へ。ね。く。べ。し。

げ。た。ら。ん。処。一。源。氏。を。と。め。れ。卷
の。書。一。ハ。二。女。卷。と。い。は。れ。今。ハ。改。め。て。う。つ。し。ぬ。
は。て。ハ。衝。一。も。又。琴。後。集。一。も。う。か。の。ま。じ。金。く。か

き。事。あ。ら。び。そ。れ。一。付。て。世。う。ハ。さ。る。人。一。も。ま。も。及。ば。ぬ。承。と。り。て。う。ら。や。う
ま。う。さ。り。て。や。く。中。一。も。い。う。こ。う。誤。や。ま。ら。ん。三。人。人。よ。く。な。ら。ん。と。い。は。れ。湖。月。鈔。本

一。大。宮。の。御。世。の。の。こ。り。は。く。か。げ。か。ら。る。を。お。も。さ。び。な。り。と。い。は。れ

後。も。ま。じ。と。あ。ら。ん。誤。也。と。い。へ。り。く。ハ。一。き。心。づ。き。と。い。は。れ。ま。じ。を

ま。な。れ。く。此。詞。の。四。段。活。と。い。は。れ。さ。ぬ。か。ら。ハ。一。此。を。と。め。の。書。湖。月

本。の。ひ。と。つ。の。こ。一。ハ。一。う。ら。ん。う。ら。ん。つ。ば。物。語。樓。卷。一。に。ハ。せ。り。し。又

お。も。せ。く。と。い。は。れ。お。ほ。り。う。ら。ん。落。窪。物。語。一。ま。う。ら。お。も。せ。と。引。せ。む。れ

○指出磯

〇六

○四段中二段下二段ノ
 三活ニワタルモノナキニ
 非ルニ後年ノ考ヲ
 山葉ニ出セルサレ
 凡ソハナホシカニ
 アラジ
 ○用カノノハ山日葉
 ニイヒレモアルガ
 ウヘニニサレクハ活語
 雜語四編ニ論定ス

ごしつハ。まづつねニ考使フヲを
 下二段活とぞ少少候。ハチマシ
四段活語の
 つゝこれをおかして。そこをいふをもおして。うけてハこの活語はと云
 論のたゞさういふとそや。そりううことを了すむひと示せる書なれど。あつ終こ
 ちきこととよく簡明
 弁へてあるべきをや。さて大和物語。あれの必云。えすてまび。一
 とのせめられむ。たゞこれハ月のみをいへる。月はあらねど。場もろの
 心も。いふはひつことなる事。うういふべくもあ。
 中二段活といへるさるなり。四段も中二段も下二段
 字。うう詩詞のうう。まろ。此う。の。古事記傳。考
 うう。とちむ。此う。さハ波江中二段の。也
 ろを。蜻蛉日記。もちあ。や。り。ち。あ。み。る。ま。自。や。みのうか印
 うつ。ぬ。ぬ。事。り。り。う。な。り。ま。此。事。こと一は ま。は。さ。と。より。字。誤
蜻蛉日記

○此さのの機モ
 磯洲崎モ。造語ノ
 改メテホシキ処マ
 レドニニ贈リケル
 処アル存ナルカウヘニ
 二十年前ヨリ字レ
 ヲル人モ世ニ必カラキ
 メレバ。スベテハ改メズ
 性年ノマニシオキ
 元サレカラ冠註タ
 ツ。ヲ。処。補。物。ス
 相レ用ヒ用ホトカ
 ケリシ。用。改
 ムルヤウノ。処。ハ。マ
 ニアラズ。
 ○も。山。ハ。活。語。ノ
 条。ニ。対。向。ノ。論。ヲ
 載。

いとおぼろぐれど。うくあつるも。は。の。者。の。え。さ。て。べ。い。と。も
 まづ。も。つ。で。さ。た。る。は。ついで。い。え。ん。く。る。処。を。く。詞
 よう。美。と。れ。い。ひ。て。を。い。え。也。い。め。づ。し。さ。事。一
 て。これ。ハ。諸。本。遠。を。バ。此。詞。の。活。ハ。別。一。む。つ。の。さ。め。を。あ
 さ。げ。ハ。あ。る。べ。う。い。ん。だ。それ。だ。それ。の。活。ハ。い。い。く。よ。さ。い
 考。や。う。ろ。と。も。や。く。松。坂。へ。い。う。と。さ。と。ひ。て。ろ。ろ。み。し。し。
 い。心。の。ど。う。よ。を。考。て。ゆ。へ。ん。と。あ。り。し。も。い。つ。し。と。三。と。せ
 け。も。た。け。ぬ。又。堀。川。百。首。よ。う。う。し。あ。の。木。下。後。よ。も。さ。あ。れ
 だ。の。う。ろ。ハ。万。葉。十。卷。四十 わ。が。せ。こ。が。あ。ら。う。へ。こ。ろ。も。往。觸
 バ。そ。う。の。ぬ。べ。く。も。さ。づ。づ。う。も。ゆ。づ。ふ。と。い。へ。る。も
論。あ。る。こ。と。な。り。 と。あ。る。と。同。じ
 ○八

○指出機

ソレカタメニ解朝
 セシ書ノイテキニ
 タル其大旨ニナシ
 ○此序文ノハ活
 雑初編ニ示セル
 カ如シ

もろくぞそよおほくもゆるり。すでに此事を言ひ論
 たるかの詞の八衝をばあつへんとそそのまゝは植松の序
 文にす。やがてこれがあやまりをしもすれぬるこそ
 もおのよべい。いさうふねべさすぢたさうびや。又八ちまこ
 の作りぬの校合せは物よそ。詞のつらね
 まいて心を用おざるもがうのふ文ハ。とふうくよりや
 まりぐちよこそハ又也たれ。そも今あそあれ。後くやう
 やうよふしき初を明むる人の出来ぬらん。ハその世
 うの百年のゆあつたは人のさ。もそよ名なきも。假字

のこがかりがハ。うは。いとあどけま。く。ん。えて。何とあう
 んおとりせせらる。がごくとにぞこらるらん。まづべまわ
 ぎよえ。あらばや。まうのそたらう。これを誤るよりして。
 ここのこ^義を^叙とく。よ。あ。あらぬま。ひのい。ご。くること
 もあるその也。千頼云。遍昭僧正のを。ゆる。ば。う。ぞ。よ。ま。れ。を。墮。落。の。こ。と。解。せる。な。ど。折。と。下。と。ハ。活。用。の。異。ある。事。だ。よ。弁。ふ。れ。を。懸。ふ。べ。く。も。あ。ぬ。を。遠。鏡。か。ど。う。も。あ。や。し。き。説。の。あ。る。と。こ。よ。ふ。つ。う。で。よ。ぞ。あ。ら。ん。と。い。へ。る。げ。よ。さ。や。う。と。さ。し。も。ち。事。も。い。と。く。ハ。き。人。も。さ。る。の。の。そ。こ。ま。ひ。の。つ。う。つ。る。事。も。ま。き。バ。誰。も。心。ナ。べ。き。よ。也。
 ようくろくろくべき事とぞ思えらる。さる以上のかうりよつ
 こむらぬること。たぐはがぬきもことよりなきよハ。ち。ら。ぬ

○指出礎

○+

と。そは頼まれたる事たるを。それいれがりて。うそくもつゝ
 けべりぬ。あまうは。たゞ。例。何。る。を。を。の。り。とは。ど
 で。す。べ。て。定。格。を。な。さ。さ。こ。と。し。て。あ。ら。う。い。ふ。べ。き。と。こ。ろ。を。せ。
 といひ。又。せ。た。る。へ。き。派。し。と。い。ふ。た。ゞ。む。え。お。ろ。そ。う。た。る
 こ。何。べ。た。事。を。の。め。は。あ。ひ。ご。と。を。あ。ら。ん。う。し。ど
 う。れ。万。葉。廿。卷。あ。ど。を。こ。れ。だ。あ。つ。け。活。さ。ざ。り。の。事
 先。月。く。何。る。ま。づ。き。が。ご。と。と。ん。あ。は。は。ま。つ。け。し。ま。せ。と
 た。が。ひ。こ。も。が。へ。り。と。い。ふ。は。
千載集の詞書の説。八衛のこ。と。し。ま。さ。け
 大物語の抄本。こ。や。せ。い。つ。る。あ。り。さ
 せ。ど。古。本。こ。の。中。し。く。た。と。あ。れ。た。抄。本。た。後。入。の。字。誤。な。る。事。い。と。ま。る
 し。又。大。和。物。語。の。一。本。こ。う。せ。と。又。い。ふ。處。あ。り。こ。の。類。亦。あ。る。を。し。あ。ど。よ。り

おして。を。べ。て。定。格。あ。り。と。い。ふ。ハ。處。せ。さ。ひ。が。さ。ご。め。の。を。う
 こ。思。た。ゞ。そ。れ。を。て。そ。い。つ。り。あ。く。ら。ぬ。せ。と。い。ふ。べ。ら。れ。い。ま
 た。と。へ。て。い。ま。ん。
これ。よ。う。を。を。り。こ。り。ま。で。も。い。つ。づ。く。こ。う。さ。つ。な。る。論
 弁。を。つ。ひ。や。れ。事。と。り。人。も。あ。る。め。ど。皆。詞。の。こ。と。さ。し。り。つ。こ
 と。の。い。ま。の。め。た。ら。ま。づ。き
 よ。う。を。し。め。い。ひ。こ。こ。と。な。り。
 た。と。へ。た。彼。琴。後。集。の。文。と。同。人。乃。子
 こ。出。し。る。假。字。大。意。抄。な。る。う。た。の。説。こ。右。の。う。ま。づ。う。ひ。え
 ま。づ。真。字。こ。う。そ。り。ける。書。こ。よ。り。て。考。ふ。べ。し。とい。へ。は。あ。ん。
 ま。づ。い。と。い。ふ。き。さ。ご。め。な。り。だ。れ。を。バ。誰。か。は。い。な。い。た
 む。然。こ。さ。る。う。の。学。問。い。う。ぐ。く。い。う。と。と。め。ゆ。く。ま。へ。こ。
 其。真。字。書。の。書。こ。よ。り。て。う。つ。り。て。疑。な。し。き。あ。り。の。出。ら。る

近世音韻原始論は
 モノヲ書寫ナホハヤ
 クヨリ世ニエシラガ
 ヘル靈語通ニ九祖
 シ仙源鈔各ノ跋
 ニ有メルカ明魏
 法師ノ落居ラ阜
 識ト稱揚シテ御
 國ノ音ハ元未四十
 ニテ足レル者トスル
 説アリシラ非斤
 スル各凡モ少カラサ
 メリ予カ安セル趣
 ハ假名遣千世古
 道ト名ケタル書
 ノ如シ

こともあるりの也。されむこそその明魏法師のミミゴリごとなどいにてミ
 一々めうれば法沙の意た後世のうまづひの漢字四声
 ぶらむぐひをいあびて 聊モよしいまんまづオウのうまこりり
 のこのことこりりし
 用あしる文字のやう古書を考る。於波の類もオ乃音
 こりり。遠越などハラコつらひしり。あて乎字もウのうた
 コ用あしる定りやう。万葉集たその中。をりく未
 審敷事りり。まづく一二をいも。置のうたハオキなる
 例なる。万葉十九巻。手折乎。技とらるあり。又和名抄
 一。並津のとらへの註。乎。木津とらり。又尾ハラ。たうこと
 さ。論なきを。和名抄。尾間のとらへ。於萬とらり。

可笑ヲ見醜自ト字
 鏡ニアレト旧本今
 昔物語ニテハ賞義
 スヘキヲセテ可笑門
 仮名ツケル趣ニ
 タル由加納諸平ノ
 考アリ玉緒線分
 業卷ニ二筆クル如
 シカノ情吟日記ニ
 ヨル説ハ版子ト等
 トテ辨セリキサテ
 近有人恆ニ面白ト
 ムツテ賞スルニ云ハ
 モレロニテ此字用テ
 可ケレドアガケルニ
 ニラ。モシト書ヘシ
 ト云ハ亦可笑キ一
 ○記傳九ハ云老女
 ハおもひ加ベシ
 字鏡娘於弥奈
 娘ハ字各ナリ字様
 思ハシ者ナリ和

かほいりぐやえゆる事。うら抄中コそれくれあきた。孫を無萬古馬を無萬と
 うけるなにも和名抄なる。後へは思えん。吟後集者のひめむべひまこ
 ともまべきりの。さて字鏡。可笑を見醜自ト註せる処。いりて
 説も誦ひか。
 乎。加之と。偉慶の註。悦也。ありて。さて於。毛加志と
 あるらり思へバ。おかしを。しを書分べ。とゆふ説。田中 道磨
 も。一。さりハ。さ。事のやうたうれど。荒木田氏の信濃下向病
 床漫録。いへるや。うける日記。ハ。固ツカ。くけても。又
 ぼくまむ梅を賞して。これをもをう。と云るあど。よらば。
 かう。とま。ハ。う。ぬまひご。そ。べき。又を。な。といえ
 うの方。かむ。な。といえ。た。方。の。と。な。れ。り。といふ説。これど。

○指出磯

葉二ハ加多波牟といへり。以詞二つ。古言法獨考二とくいへることなり。いと終ハ一とてクをたし。論定ハせん。又万葉集畧解。本文加多波牟の下をかくいうことも論ずることハあり。して註の文二はうとふとけけるハいとまごうハ一とさわざなり。又撒をうち。

の傍字といふ事誰も争ふことハなくれど。万葉集二可志と
 うける処もあり。又馬ハうまれうたふと覺えられど。馬をむま
とく事。

若田氏のふちハ論まどハ
 基を誤るといふ事ハ
 万葉二も和名抄二も無末ともうり。
 又梅を万葉二牟梅とけける処あり。古言折二字の誤とせざるを識
錦杖ハいさる。馬をむま梅を

ひめとけける事万葉二とハなるれど。こゝ後の辨にて必誤也といひがし。天曆の
 頃よりあういへりといへり。牟麻牟梅字誤二まれそハ別の論。万葉今の本二にてこゝ
 えたり。天曆のいより
 とのこゝにいひがし。又真字書ののりども二教ををへへかく事
 あらそふべしぬまぞ例証多くれどまねハ亦古書二教江

○山口葉二爾太遠
 一論ヲナシケ
 リ。下卷ヲ合考。
 ○上云ヘルウ。どふハ
 万葉ナル多ク字イ
 カレシ。字鏡ノ如キ不
 ヤ正カラ。コレヲノ
 所ス。テ。底。影。アル
 ハ。千。世。乃。古。道。ニ。云。テ
 世。人。ノ。誤。ト。ス。
 ○保ノ字ハホト呼ノ
 ミナ。エ。ハ。葉。ヲ。開
 保。比。ト。カ。ケ。ル。ナ。ト。ハ
 ナ。ホ。ウ。ハ。ひ。ノ。コ。ロ
 ナ。リ。ケン。下。ニ。至
 テ。モ。冠。昏。ス。ヘ。リ。

わらわるもあま。句のふは。ある事も本めかれど。万葉二。爾
 太要二書。爾太遠二書。る処もあは。以遣を選の字誤うといふ説
いとをさかり。選字二ある詞

へるといハ俗云二とすれ。ああるものを。万葉二とへるといハ。選字を假
 べくたあ。ば。そ。も。く。以。遣。の。字。ハ。り。な。の。を。あ。は。れ。詞。の。り。と。ま。ね。は。い。い。く。を。や。け。也
 し。又夫を乎字。刀とくへき事。和名抄二入してことわりもこ
 るべきなれど。字鏡二ハ以字
のまの注二乎。不。止。とある類も
 あり。又恋しきを古事記万葉二とふ。一ともいほ。一とも云る。
 又初のうな葵のうなの和名抄と字鏡二を異なら。又仰
 も令員も古書のうへにておほせおほせ二あるうと思ひれて
 紛ち。万葉二すべておほせのうと云れど。其卷一おほせと云。せ。外古
書。凡て。紛。ち。た。れ。バ。一。や。二。監。抄。已。降。る。事。い。い。ら。め。く。也。

○指出磯

○十四

假字ツカヒノニモラ
ハシキトナキニハ非
ル。古昔トイハ氏心
セズ。カイナテ人ノ
モノ各ルハソモイ
タド、数ツアリケン
サハ正キ物トテモ多
カル中ニアヤシケル
ハタヨリクモナカル
キモノカハナホ穢
洲崎ノカクニユシ
ト氏ヲモ考ヘテヨ。

出雲のさゆふと云名也。和名抄に狹結とあり。此名乃其。
彼必風土記云。狹結郡家同所古志國佐与布云人來居之。
故云最邑。神龜三年改字狹結。これと最邑あつたさい。フなり。派佐与布
と云人云といへるもいふ。老いをおよし云如き例しハウレト佐与をサイ
と云てそれが借字に最とありとも云らるまじ。
又最ハ④一音のうなにて、いニ邑を填て、
りのとらう云人も有り。若しげなるべし。又字を改られし時、サイフの
くも佐与布のくも異なりて。狹結の字と定められ
しもいふたれむより。ウレハウの假字大意抄なる。先真字トてまら書コトト
考ハレハ正キ事。これとあふかりハ借
執りて。さて又これ大意抄に、ウレガまらしてまら書云
ト似たり。
トても、その中よりその証と云べきふりも有り云といへるも

○更ニ考レバ阿保比
阿保。己ナトモカノ
万葉ニ蜀豆ヲ渡
保。豆トカギ。給。ト
他麻保トカケルト
曰ク。保字ハ⑦ノ
音ニテカケルモノ歟
久字ヲ⑧ニモ
ニモ用井ケン類ニ
テ氏思ハルレドナ
ホ定メ難シカレ。

うべかり事也。あつる古今集物名。葵狐うくし逢日と讀。
曰保備。初を逢期。かけてよめ。保ハあま。と。字鏡ハ阿保比
阿保。己とらる。ハウもひり。似たり。又拾遺集。長谷。大系
登辺のつばは。これつ。お。う。う。の。あ。ハ。云。といひ。後拾
遺。秋の野。此。露。い。お。う。あ。を。ま。へ。し。拂。ふ。人。を。ぬ。れ。つ
や。あ。あ。と。あ。る。ハ。お。と。犯。を。う。け。た。る。さ。ぬ。り。こ。ゆ。い。へ。る。説
此。を。民。を。ハ。ち。織。錦。女。の。考。也。此。中。後。拾。遺。の。ハ。詞。の。う。ら。う。さ。ぬ。を。も。犯。よ。論。げ。べ。き
也。さて。又。上。い。へ。る。こと。を。コ。ト。の。う。あ。を。用。う。る。事。も。あ。れ。を。それ。も。た。は。る。ん。ん。ん。
あ。う。う。バ。げ。し。犯。の。う。た。ハ。オ。と。定。む。べ。く。思。は。る。れ。ど。う。思。へ。た。れ
さ。う。う。な。う。う。長谷川菟雄云。拾遺のつ。お。う。し。又。後。拾。遺。か。ら。お。う。う。を。あ。う。う。と
して。犯。の。う。た。を。定。め。ん。事。ハ。い。と。お。は。つ。う。か。う。の。あ。ハ。う。を。い。

○指出磯

○十六

分明なり。一ごとく。語よりくつされることはいとくくかきべ
 し。さりとてひこぶる一かふる事はいとく論ぜどとてやむべき
 一もあしねバ。大意抄の説をぬつ。然らばといふべき
 一もあしねバ。大意抄。五十音よりても考ふる
 といへるも。がよいといふれ。ことなれといぬ。とちぬとの如
 き。さして古書のうち。一叶ひが。ささぬぐひもすれ。一ハた
 さい。あしねバ。正監抄。一とやくこれをいし
 いぶら。一とそこのうら。されバとくいへバ。いさく
 そのく。めく。かのつうひさぬ。一資格ハあさ事。せともりあべ
 き。一似たり。あつたあれど。ふく。思へバ。必と云ておくべき物

○假名定格ナレト意
 得々靈語通音韻
 聲家源始論等ハ
 五浪反ハク定格有
 トハ五七下ラ古三音
 ガル悦目抄。假名文
 字運。自稻のそく
 敬假名運。近道大
 規抄。和漢字名録
 類。字大和詞ナドノ
 如キハ杜撰ハレ。ス
 イミレウレナカラ自
 筆跡ヲ種々ニ。殊
 ニあや。三行ノ。い
 え。ふれを。ラ。撰
 クセル冠辭考。字彙
 考。等ノ如キ。函弁
 反。ハレ。サ。各。此。比。フ
 レバ。大意抄ノ説ハ
 カノ正監抄ニ依。憑
 セルニテ。モトモヨ。シ

かな。ね。ほ。す。べ。て。ハ。い。と。お。ご。そ。う。と。つ。つ。む。べ。く。そ。つ。し
 文。十。二。年。四。月。四。日。思。録
 み。て。い。う。へ。あ。ん。あ。び。さ。ぬ。ハ。ダ。一。大。意。抄。た。る。説。の。ご。と。く
 かな。べ。い。と。を。思。は。る。れ。た。し。ま。名。本。な。ど。い。づ。れ。も。字。誤。お。ど。多。う
 べ。く。正。也。一。ハ。む。う。一。人。と。い。へ。ど。も。あ。と。お
 得。ま。る。も。あ。る。べ。た。れ。を。学。向。け。る。人。ハ。そ。こ。を。考。へ。め。む。で。さ。か。り。詞。の。く。ら。さ。も。あ
 け。り。古。書。の。中。一。ま。れ。く。誤。れ。る。あ。と。あ。る。を。さ。へ。て。これ。を。正。さん。物。も。あ。ま。ざ。ら。ん
 也。教。を。け。を。い。尾。向。を。ハ。枝。万。も。も。書
 べ。一。古。人。も。何。あ。り。い。ん。ん。か。ご。と。も。又。い。ふ。へ。た。で。一。を。え。と。い。あ。も。の。よ
 万。葉。廿。卷。一。佐。文。安。礼。天。と。い。へ。る。ハ。さ。く。あ。れ。と。有。べ。き。処
 同。一。ほ。ろ。波。や。り。て。ハ。へ。た。ら。る。べ。き。処。其。外。前。後。の。う。け。あ。ひ
 の。い。う。一。ぞ。や。あ。ゆ。集。中。い。と。多。う。り。又。代。の。村。集。も。い。う。か。ら
 ころ。人。の。心。及。む。で。ち。や。く。ろ。類。も。あ。る。べ。し。又。ま。れ。一
 たり。と。よ。う。作。者。の。ひ。が。こ。と。せ。ら。れ。も。あ。ま。ま。け。ら。れ。し。一。ん。バ。と。て。け。べ。て

○指出磯

をもしせられんば。それ一つさても又おりよふもけりりる
こと。それをもし加へて。うよかくよことなるのひらきさきり
事ハ。かのめよして。あるべきりのとハおもたぬよ。紙バ。さ
らうひつけて。せしうき。それをバ。付。られハ。うでの磯
より。又。う。出。て。思の外。又。う。な。れる。あ。れ。バ。と。お。り。ひ。て。
磯の洲崎とあづけ。おきうし。と。その業をも。次。次。と。あ。づ。べ
て。ひ。と。ぢ。う。な。う。た。く。や。る。た。い。づ。れ。も。こ。と。あ。の。ひ。ら。き
きの論め。と。お。か。う。る。ぢ。の。あ。や。か。れ。た。ぢ。う。く。ひ。あ。を
辛丑夏。二書。九。ふ。冠。註。ふ。つ。こ。と。も。書。加。う。た。あ。づ。む。

磯乃洲崎

むとひううけなき。評めを。と。こ。ひ。ま。り。て。評。覧。を
させ。ふ。か。の。が。え。せ。書。さ。う。出。の。磯。の。中。に。詞。の。ひ。ら。き
き。と。ひ。ら。き。と。い。み。う。ん。を。用。み。て。あ。る。へ。き。を。の。た。う
る。よ。う。に。評。論。し。て。う。の。假。字。づ。う。ひ。の。深。く。心。す。へ。き。が。如。く
とい。む。け。り。し。を。さ。し。う。て。さ。う。さ。う。と。い。ふ。假。字。ハ。一。が
とい。へ。ど。も。あ。が。へ。バ。や。が。て。そ。の。詞。の。義。を。誤。ら。を。の。た。う。れ。た。
い。う。も。い。く。深。く。そ。の。う。を。用。み。む。ろ。く。古。書。づ。う。を。考。て
物。は。べ。き。こ。と。な。り。と。う。え。案。の。活。と。い。ふ。こ。と。ハ。さ。バ。う。り

○おはさるん 伝詞
 ノーハ山口 卷上
 ツバラニセルカ如し
 筑磯洲崎ナハ同
 對庄ニ不可キ

義一あづるりのことららば。さるをあかがちと思ひい
 して。古書どもの中。と有ハ多くかくあるハ少き例なれ
 ば。そいと少きうこハあさうハドとやういふんハ。こ
 よれるわざうそよく。ことバおりのつひ詞の如き。
 あらおハせん。おえさんとも。何あまを。そのれたさん
 とのひうを。音便しかハさうげといふ。そとよりあう
 いふべき詞なるを。これをバ。おハさうげといふよりハ。れ
 ハせうげと云う。たぐいさ。せまどいふ。え。をろしうげ。
 さて凡ての詞をさやうのそさごめてハ。却りて古より

かたぬぞとの路ひさ。たるこ也。謹て兼りぬ。や
 れバとよりハ。彼詞ハ。衝れ説た。ど。か。つ。の。給へ
 るやう。た。おほらう。の。物。せん。と。や。ま。づ。ハ。思。定
 め。侍。り。が。然。又。い。う。なる。よう。侍。らん。た。は。詞。の。活。といふ
 こと。を。バ。い。と。や。ん。ご。と。た。ま。さ。ご。の。ぞ。と。ま。や。く。思。ま。せ。ひ
 ころ。く。せ。の。復。り。や。う。さ。う。出。侍。り。て。ハ。う。こ。う。侍。論
 め。を。う。へ。り。て。疑。な。う。う。か。思。ひ。せ。う。げ。も。え。侍。らん。げ
 せん。さ。う。う。う。こ。う。を。ん。こ。う。こ。う。こ。う。こ。う。こ。う。こ。う。出。侍
 り。て。再。び。み。さ。ご。め。を。こ。ひ。せ。う。げ。を。お。も。た。の。あ。れ

○磯洲崎ニ

そのよとハおほしうま修あまれさうまをひをさ
吟ひてよ。抑詞の活といふハ。凡そおよそ文うく人ハ
さうもいふべし。すべて其の心のこと。むの雅うたう趣を
バよく味ひえん。ハ。あうくこく。心をやよせん。バあるべし
らべし。おほし。但し。詞ハちま。神代よりおのづ
らたう定ありて。いづるかどハ。全く志うなりとハ
思ひぬ。この書。又。む。つ。ことをも。活き。し。あ。う。ひ
つ。念も。こと。し。あ。え。を。中。し。あり。と。ある。こと。い。く
子孫の事也。いひる。し。学。ひ。や。らん。し。あ。う。た。わ。こ。と

た。あ。う。ね。こ。と。た。う。ハ。活。し。う。わ。ざ。う。あ。ん。い。つ。る
え。げ。う。う。こ。と。わ。り。又。し。これ。を。誤。て。古。の。例。た。が。へ
る。事。し。あ。れ。た。あ。う。あ。も。それ。ゆ。え。い。つ。あ。く
又。お。し。う。は。事。ある。の。た。う。あ。う。の。さ。た。う。あ。る。え
云。語。の。義。を。も。誤。り。て。つ。ひ。ハ。意。の。と。ほ。り。が。い。あ。う。も
ありぬべし。又。あ。う。こ。と。は。い。つ。う。ぬ。ひ。が。こ。と。は。あ。う。も
い。も。う。る。あ。う。い。で。あ。う。を。い。ま。ん。そ。う。ケ。リ。の。約。キ。あ
は。し。し。一。説。あり。て。名。を。う。る。ぜん。あ。う。う。あ。う。へ。う。あ
つ。た。う。こ。と。は。あ。う。か。し。こ。げ。い。へ。る。あり。さ。う。ハ。と。詞。の

へららさのうらうらうときがぬふひさぶらう五十音
 じより。さぶらうよまの延約といふことをいひてときや
 まれるよこそ。扱もケリとキと。その詞の異なるよまぶらひ
 て意も同くねおもふまは。こま書ども扱よくよむ人ハおの
 づらもあやぬべられど。そのらぢめハ。けらうるすようめ
 てといふことをバ。づらうもようくわらう味ひ人よもめら
 とさきさうせんよハ。いさめ侍詞の活の如脚を正しうんこあ
 く事ハあしじ。らをめめぬれむ。のケリの約キとなれる
 あ。バ。ケリをケルといふむらへては。キのうつれるを。こを

いへケル。の終れもクといふことを。又キといふ詞のさうそ
 コソ此辞テラハに應はるときは。カといふ定たるを。そをカと
 のケレとをあをせらう。いふ考へても。いづれの詞のいづれ
 のよ約まるとも延らるとも。さういふれぬことわりな
 ともようく。ささまへて。そケリをキの延らる也あど
 いへる事乃みどり。はさかどをもおのづらうあること
 せり。ささまひつら。いさゆるの後又むらうの詞づらひ。給ふこと云
おれら斗ぞの鮮あと思合ひてことをば。おのがよにつけていふ人乃らへを殺ひて云
 とあるを。そのおのがよにつけていふたるハ。路へ路ある

○大意抄三居を乎里
 とも。あし。海。手
 里。乃。反
 け。は。ル。毛。例。ノ。カ
 紙ナリ。
 ○給ふ他三給ある。自
 ノクハレキ。ハ。山口

葉中ノ十六丁巳下
ニ述ベナホニツフ
サニハ三全和語説
ニ

給ふれとの活きて。給りん 給ひとハ活う人の方へ
致ひひなるハ。給りん 給ひ 給ふ 給へと活て。給る給
ふれとはさえて活く事なとさ也。ううこれを每ふれだ
と明なる事なるを。さ毎へぬほどを何となう給ハ
此事なるううの消息文例なる毎あどの格。いと
給んごううとさても。狂談といふ物物をへごう
きとらうくこちぞびさ。但一かうやうのことらう
おのれよく弁かともあくとも。うの文例の説を賞え
なごうて。ふつマ物せば。此詞をつうひ誤るうれひを

まぬうれてもあまへれど。さうも心をえ用みざる後ら
給ふといふも給るといふも。とも一詞一事と心持
がひよつうひ誤るぬべし。又人乃それをぬのま一む
わがかれをぬのむとのたちめあども。詞の活といふ節を
ごうよくたどりえてこれむ。さう一給あべきかた
いりしめたることなるを。これ小沢某宗匠のさうもせ
考たる事よきなるしうど。このぬのむといふ詞の事をバ
いとたどくしけよ。 振分髪よ
うありん うさうむつうしさとさごと
せしをこれたごうまくハ味ひぬざりしや思とぞ思てる

さうかゝる此宗匠の考れ。そのもぐひ少くいとめ
 たことハあまひく人のこゝろをこゝろ。がよさやう
 なをど。は詞の活ありてハ。其詠州六帖よりして。その
 りづり。そられ。扱の古書ども。遠ひて。いづれ
 きたよのさとし。おもむき。かぎり。よれることある
 た。又。鈴屋公箱のめき。ハ。けり。より。より。づり。り
 こり。えん。は。詞の活。いふ。こと。をも。かく。さ。め。あ。む
 け。節。の。女。を。ハ。別。一。あ。ハ。ハ。も。お。う。れ。い。づ。ど。さ。て。い。も。あ。は
 せ。お。い。あ。へ。て。の。こ。ろ。さ。く。せ。を。バ。ま。ぬ。う。れ。ぬ。こ。ろ。ら。り。て

○近世人の家集
 言活活ノ古
 二月ケルナキハ
 葉集後鈴屋集
 ノミナラン山
 采ニイヘル如ク
 ハカリ假名ハ既ク
 ミダレタリ世ニ
 モ。詞ノハクヲキハ
 今ニ比フレバコ
 ナク正ウコソ。

彼又集歌集たゞすべての中。これも。その代のこゝろ
 づり。い。そ。い。み。へ。い。う。ま。り。ん。と。い。ち。と。こ。ろ。も。少。う
 ら。ん。然。し。も。さ。よ。の。人。も。さ。ハ。い。へ。ど。そ。正。さ。大。う。た。れ
 の。づ。り。い。う。が。ハ。さ。る。ぞ。い。う。こ。れ。や。さ。て。か。く。い。ひ。て。も。狂
 詞の。い。う。こと。い。ふ。こと。ハ。さ。の。定。格。の。ち。る。め。の。た。う。び
 といひ。よう。やつ。た。う。の。そ。う。で。は。う。く。も。詞。の。義。ハ。め
 きた。さ。事。ぞ。と。あ。ひ。て。も。い。ま。さ。う。う。ん。ぜん。ふ。い。ん
 はん。乃。それ。を。い。ふ。の。ま。う。む。を。い。ま。ん。た。の。む。人。を。た
 どの。い。ひ。う。ま。う。バ。たち。ち。う。せ。心。こ。が。い。ぬ。べ。

そを辨むが如くいふ。そをうけ漢文として物してさづかう
ふをやりつゝさづりかへて顛倒錯置のあるをいふて
くても意ハ通りぬかういひらんふがむひたるべし。そ一舊
字の意なる詞と經字の意あるをいひうら誤なりども
全く詞の活の節よくさうが故也。それらを詞の義を失へ
るといふべし。如くや。又契沖阿闍梨真淵翁などものとう
きつゝそのいふ。それハあり。まひうらといふべきさ
とのこれうれとあるも。大く々々詞の活さるを命へられざ
り。ゆゑとさうさ事ども多し。又古の書丸の中

いふまねくあやうきがあるをうへて。ハは例ありたど
いふ。それとさひぐんえとぞいふべきさ。り。人方そ教を
を。い。とまてもよう。と云とも。古のうまの正しきをんね
ん人ハそれとそも諾みまどき。准へおりあべし。さるを人ハ
よう受ひくべし。江次第よもを。い。とさ。それとぞれ
を。い。と。の。ハ。執。せ。び。い。と。さ。を。い。い。う。へ。の。う。な
れ。定。り。あ。る。こ。と。成。あ。く。ぬ。が。故。の。さ。づ。り。こ。と。い。ふ。へ。さ。い
ら。い。び。や。詞。の。り。さ。ら。さ。も。古。い。と。う。か。ハ。も。定。り。ら。る。こ。と
か。ら。ま。ま。れ。う。つ。誤。り。た。ら。あ。と。を。と。り。て。深。く。考。ふ

表計とは旧く換てせぬれど古のうまづうひを味ひねらる
上ハ今もそのまぢめよくあられてさそいと面白さたる
ばや。終ふと終つるともそ意あつぬほどハ旧く極くせぬ
まど古の詞づうひをよく味ひえぐる上ハともそけぢめの
よく弁へられてさそいとおりろさそくちけをやうう
やうくハ考ふるハ必おろろふ意ねさるべきそのハあ
らば。是紙おほろろハ心ねてうハかくハ定りなうハといえ
んハうろろハ定りなうハといひハ明魏法師の論の如く。そ
まそづうろろのいひをほろろれおろろろろハそそそそ。そも詞の注

どの事ハふく心ハつべさハあつばや。さて上より下まで
ハいづろろハむひてせえさるもあつむとりごつさるハ
書信ハそそハ信書バ。そそそみ評をそそわぢと西覽せを
ひろハ似つろろろろ。あめげたるところろろやあらん
と思へせばいとハそそハ信れど。そそ心ハも何せぬいと
拙ハ心事とりかがる。又うそめたる事をさへ物せんハ。あま
ぢひハうぬへても信れまろろ。ばいとつたさそ論めだ
の。さろろハ心もゆるるばやあらんと思ひ定め作りてな
む。ろろいとあやろろ書出作りつるを。ちろろろハ西覽

一ゆるしそ。たぢあひねぐもくを。バどめより中めく。さし
 でれ磯もいひを。やうようへゆくも詞の活といふこと
 一。いりくやんどくあきまのぞと思ひ入り。うらるか。く
 か。さくせを。まあれんを。を。ば。いうで。め。よ。と。き。終ひ
 一。あづやう。小。さ。と。く。終ひ。て。た。う。ら。ん。の。論。め。を。だ。せ。終
 へ。さて。又。と。く。し。笑。へ。せん。い。と。う。く。こ。き。事。は。終。れ
 一。ど。ん。の。ま。り。ぶ。う。く。み。つ。と。を。終。ん。と。あ。り。く。一。の
 一。また。ぶ。り。の。志。を。ば。た。う。く。お。り。う。終。へ。終。る。ま。ま。小
 一。は。何。ど。う。せ。む。へ。る。水。字。話。の。中。に。て。も。例。の。な。ら。ぬ。こと

〇五十音十行ニワタ
 リテ。⑤韻ノ音モ
 ヨリらりるれと活
 タト用カ又活トナ
 ヨク矣フヘキ。山
 口葉 下ノ冊六ニ
 七八九丁

一。美のもちあさせやうよつとそ。乃事。あ。び。よ。さ。う。め。事。の
 一。うへ。も。お。ろ。う。た。る。ん。よ。ち。と。笑。う。え。さ。と。り。終。り。め。を。
 一。ひ。と。つ。あ。つ。と。ひ。ま。あ。う。せん。そ。を。ま。づ。縣。居。翁。云。人
 一。ち。ど。め。て。古。言。の。字。と。り。よ。こ。し。を。と。さ。す。り。と。ん。と。ん
 一。る。は。う。さ。さ。す。り。ハ。例。乃。く。よ。れ。ら。う。ろ。ま。ま。と。さ。す。り。へ
 一。たり。か。ど。ある。べく。ぢ。思。ひ。あ。る。又。あ。ぢ。ハ。へ。て。い。ひ。お
 一。き。む。へ。る。こと。お。と。巻。の。た。う。う。を。り。く。こ。也。これ。ハ。あ。ぢ
 一。ハ。ひ。て。く。こ。そ。り。ゆ。べ。き。詞。と。お。り。ひ。居。終。り。こ。ハ。詞。ハ。衝
 一。の。作。り。ぬ。く。さ。へ。君。と。同。く。ん。え。を。と。く。と。ん。と。ん。を。お

のれむとせ思ひよれる事うらひうバげよらん
をそれき。但しそれきけいといふどくしとあはれ
しわりひみけちを古書どもれ中不。あぢをへてたを
い花たふあうし。まをさのいべきことあつたことわり
たど。うめて明めむへるや。けしむをへへ移へ。それ
うけたまはりけしむ。バいうむりうれしうけらん。あは
けやうもおのがんよ。はいうよぞや。おひひあまふあみ
ことむづひあふことなれど。思ふことかあひひいぬ
ならんし。そをえさせつるあつたうひて。そをよけ

くいぶうしををりし詞よを。いとせむうこうけ。路りう中。けい
きよよりそ。うくまを。せえさ。ゆるよあん。
女已下ニひくニひく。うの筆話よつきてを。あつたよかき
付添りし事あれど。さうも詞の活の事ともなうて。こ
ろよころろざん人のえんよ用あるべしとおもたう
事よもあはれ。バ皆省きつ。けいよう。そをうが。問訊んと
ういつけ。うらハ。えか。おろうたう。事よ。て。清。あ。氏。より。の
答の趣。よう。う。くぞ。あり。る。但し。そ。二。三。条。め。い。ぶ
し。事。う。き。も。て。ゆ。さ。て。の。末。の。処。ハ。

上の件のいぶかしき事。二ツぶくは口のたよりけさせあふ
べきハ侍のまどろれど。我門いと清くあな惑ひぬ。あそ
まきさる愚かたをばうへゆくも何それ英むひていぞ
たゞ秘んどろくを教へむへや。あかき事。

文政三年五月廿一日京の振飯よりある事

あれとよき事としての磯のたよりかきく事へくる事の
おこりよそ倭よりい付し也。さそ清水氏にたよりてしを
そ即よこれとまづとて明けき答のありし条も有り。
古

よつきの事。又これハよく考へてをいらんてん。つくり事ども有
き。文政六年よりこれ彼江戸に出し時。そのさるそのをば
あむくまもたうし。つくり親しうさみよゆれ
物ごうあひし。何しありて。むく。勢れ事よ有て。う
の詞ハ衛とよまげふとずハあふべうさる書なりといさる。なま
いと睦じうりた。然よさしハ知らざらん人の。若。争ひ別をし事
の極し思ひむがむふもあらんうも。それやいあやうくさ
もことわりハおくぞうし。さて今又うの假字大意抄よ
そりて。擬け詞の活用の事をいせんとい。さるハ活語の事

扱たよめたるまどれりのとありふちりしよりして、ちふ
つらぬもくれ大意抄ハ、いといし、よき書とありへ、バ、う
いひめてゆく、よつけても、そ抄をば、り、うん人のまう、
ん事を、も、うめてありひての志、日、ぢ、ぞ、も、うの抄、一、和為
宇惠乎、れ、仍、り、よ、て、活、く、詞、を、バ、後、の、よ、の、人、お、ほ、く、ハ、誤
て、作、る、こ、と、也、殖、ハ、宇、惠、宇、々、宇、和、流、と、い、ふ、詞、な、る、を、宇
閑、宇、由、お、ど、い、ひ、云、閑、と、波、比、不、閑、保、の、行、由、ハ、也、伊、由
衣、子、の、行、な、る、を、和、為、宇、惠、乎、の、行、と、三、行、を、混、ぶ、る
事、ハ、云、古、書、一、ハ、誤、も、作、る、べ、し、といへるを、み、よ、實、一

くべある辨論あり、げや、さて、よ、宇、々、と、た、く、う、よ、か、ら、の
りの、れ、り、や、あ、う、ら、ん、よ、そ、ふ、宇、不、宇、由、一、ハ、あ、う、ご、ら、べ
き、こ、と、わ、り、を、あ、る、ハ、宇、惠、と、物、一、又、く、ら、よ、う、り、れ、し、て
あ、る、べ、し、と、い、は、ぬ、系、詞、乃、く、く、き、さ、や、う、な、れ、バ、也、又
お、む、え、い、な、え、お、ど、の、閑、惠、一、あ、う、ご、ら、こ、と、を、う、ら、ハ、お
び、由、い、ぢ、由、の、く、く、き、た、ら、べ、き、を、り、て、あ、ら、な、る、類
び、の、こ、と、だ、げ、一、い、と、お、ほ、り、ら、さ、て、躰、の、語、の、う、た、よ、こ、れ
ら、こ、の、う、た、よ、そ、れ、を、そ、め、う、あ、た、る、べ、し、と、語、の、こ、と、わ、り
よ、う、り、て、う、ち、の、定、り、あ、る、こ、と、を、さ、し、る、よ、も、は、詞、の、活、き

む。假名の事などもあつていひまじりあへ。さる人て置の
うかハラクともうべし。艸庵集に露を小倉の山のみ
ぢふといふ言われど。いひ一人のたもて。りこく
耳古へ学びよんくきげぬぞう。たゞく露を小倉
のれ多きひも。むげの降るそよのそんゆる。つらげ
頼政卿の言俊頼朝臣のあどもあればあど。世人
のよくひよことなるを。そを假名づくひのすてよそんれりし
世たればとぬれ。さよよつきてあか 溯り
て考まば。しうのこあへ。万葉何れなほあろくもまご
らえしれあさ。し照るおもあれ。さる傳の磯。しすあち

いひつろが如くたるを。又さる考へつれば。うの山口梨
木のいつろ日本紀私記ハ。和名抄に引らる古き正さのふ
むあへ。ざめれど。さりとそつろたるすゑの世のとのい
ハあへ。又類聚名義鈔も。其も三坐類字抄と一異の
論もあれどそハとすれ 古さとの。又
神遺方。ホ語ガヘキヨク多ク
むカマ降世の約 和名本草を皆古きあかるをこれの
なり。記紀万葉等の古く正しき小あひび。さうあつらひ
どもれ見。或も八百年のむう。しをて。正ぬハつれ。記
紀万葉に違へ。假名くさ。おほく人あが。よふ。あて
を。く。り。や。と。あ。や。し。ま。ら。筆。此。跡。の。ま。さ。し。の。こ。れ。る

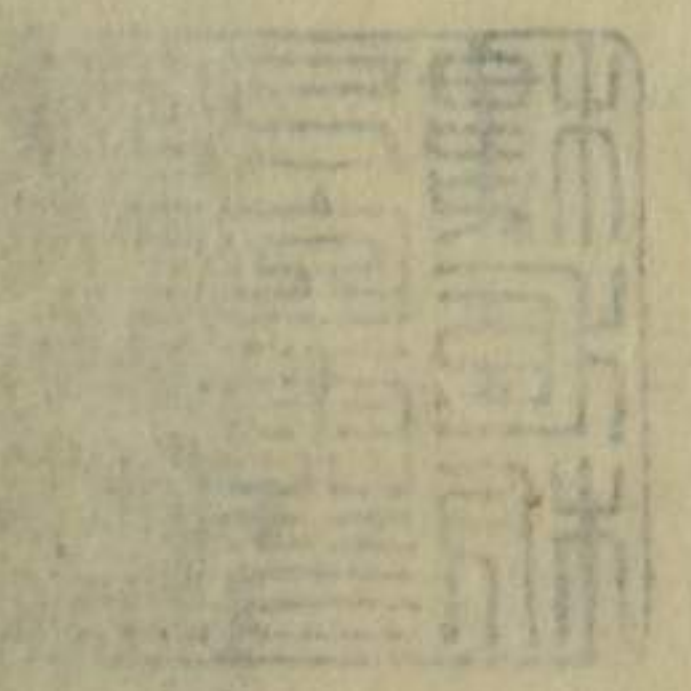
かどもまぬくハ世に又くまゝぐふを考ふる。古今集より上つゝいへども。人ごとしかりそめよも正しくのさかづひせしものハ想ひやられぬ。然れどもその正しくぬをバよりや古き世も。いもゆる杓子定木に取べきことをハ。況や山口菜一やとてその世の吉野拾遺かともあはしく又きたる詞づひの。それよりのちやうくは倍びりてこゝをバえくし捨ざるべらんやハ。詞のりさうなれこと。一もくざらぬ。すべてくざれるよれやびやうたうぬまとなづひハ。何しまれりしよりこのむまづきよりハ。

某宗匠の哥此端。つゝ入来てと云る造語のあるをバ。こハ平家物語などハあれど。源氏などハたゞれど。あど。即清水氏の詠藻糾謬と云りの一評せしが。めれ例をる。

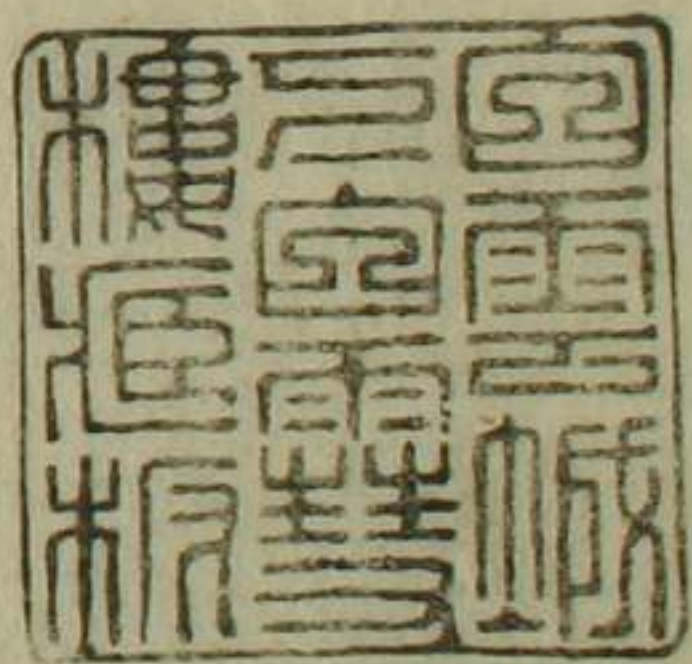
天保十二年九月

義門又記

天保十四年八月廿九日



天保十四年卯癸八月刊成



若洲小湊大津町

松本屋利三傳

京寺町通蛸菜原下凡

蛸子屋市右衛門

江戸芝神服前三傳町

田屋嘉七

大坂心每橋安土町角

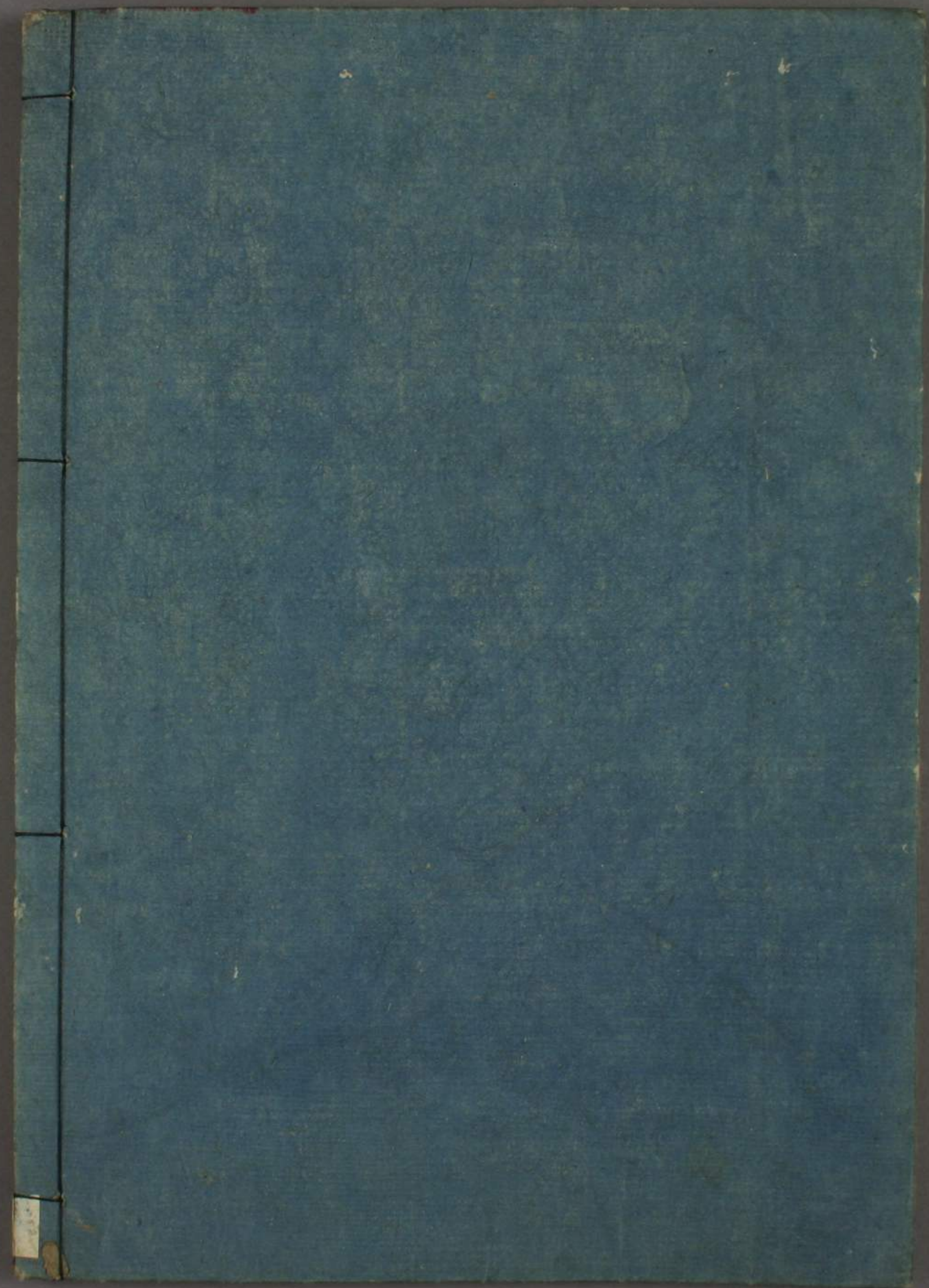
河内屋儀助

制衣本弘所

平家忠盛... 某宗西の長九...

書 林

京都寺川通佛光寺	河内屋藤四郎
江戸日本橋通壹丁目	須原屋茂兵衛
同 貳丁目	山城屋佐兵衛
同 貳丁目	須原屋新兵衛
同 南傳馬町壹丁目	山城屋政吉
同 下谷街成道	英藏
同 大傳馬町貳丁目	丁子屋平兵衛
同 芝神明前	岡田屋嘉七
同	和泉屋吉兵衛
大坂心齋橋筋本町角	河内屋藤兵衛
大坂心齋橋筋博愛町角	河内屋茂兵衛



本居先生哥^異序
妙玄大德筆錄

活語指南 二冊 已刻
奈万之奈 三冊 同日
山口梨木 三卷 同日
玉の緒線分 五冊 在
類聚雅俗言 二冊 副刻
いそ清水 一冊 副刻

さ志傳の磯
磯のすけ起

合冊

製本所

松本屋利言傍
蛭子屋市右傍
園田屋嘉七
河内屋儀助

ホ 2
5626

